

第33回大森地区実践勉強会

実施レポート

保険学部 田中 敏郎 佐川 雅夫 中畔 勇一

第33回実践勉強会 9月14日実施 テーマ 潰瘍性大腸炎について

参加者 敬称略

美原薬局 田中・増田 ひろみ薬局 宮田・橋本・芳田・今岡・鈴木 アサヒ薬局 中畔・飯塚・大高 江島薬局 江島・浅野 フレンド薬局 糸川 さがわ薬局 佐川 コーコク薬局 松原 平井薬局 藤巻 みのる薬局 押切 きぼう薬局 藤岡 秋嶋薬局 秋嶋 新庄薬局 龍野 他1名 ちどりフローラ薬局 亀井 福田薬局(仲六) 浦勇

潰瘍性大腸炎についてキョーリン製薬 渡辺さんから説明していただいた。

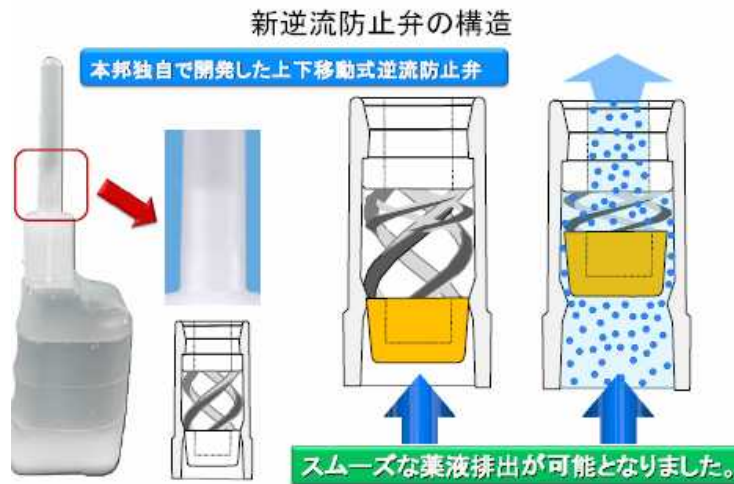
大腸や小腸の粘膜に、慢性の炎症または潰瘍を引き起こす原因不明の病気をまとめて炎症性腸疾患 (IBD: Inflammatory Bowel Disease) と呼ぶ。潰瘍性大腸炎もこの炎症性腸疾患のひとつで、大腸の粘膜がおかされ、そこに浅い潰瘍やびらん(ただれ)が多発する。初期の症状は腹痛とともにゼリー状の粘液が排便時に多くなり、下痢になる。しだいに粘液の量が増え、血液が混じるようになり(粘血便) 血便がでるようになる。さらにひどくなると、一日に10回以上も粘血便や血便がでるようになる。このほか発熱や体重減少、まれに便秘が起こることも。これらの症状は、よくなったり(寛解) 悪くなったり(再燃)を繰り返すため、長期間にわたる治療が必要とされる。原因は一つではなく(1) 遺伝的要素、(2) 食べ物や腸内細菌、化学薬品などの環境因子、(3) 免疫異常の3つが重なり合って発症する病気と考えられている。従って、はっきりとした原因がわからないために、完全に治療する方法がない。年間約5,000人が発病している。男性と女性で発症率に差はなく、発症年齢は男性で20~24歳、女性で25~29歳がピーク。大腸癌の発生リスクは高くなる。

潰瘍性大腸炎の治療には、薬物療法、食事療法、手術があるが、基本的には薬物療法が行われる。薬物療法は5-アミノサリチル酸(5-ASA)製剤を基準薬として、重症度や病変の範囲、過去の薬剤の反応性などに応じて、副腎皮質ステロイドや免疫抑制剤を組み合わせるコンビネーション療法が行われる。軽症の患者さんでは外来での5-ASA製剤による治療が基本となる。重症や全身症状を伴う中等症の患者さんでは入院の上、心身の安静を保ち、ステロイド大量療法や免疫抑制剤あるいは血球成分除去療法などが行われる。多くの患者さんでは、これらの治療で症状が消失して寛解に至るが、重い合併症が生じたり、これらの薬物療法が効かない場合は手術が選択されることもある。通常、いったん寛解導入できた患者には、再燃を予防するために5-ASA製剤による寛解維持療法が行われる。なお治療薬には、同じ成分でも、注射剤や飲み薬、肛門から薬剤を投与する坐剤や注腸剤がある。どの薬剤を使用するかで、薬が届く範囲が異なるので、重症度や病変範囲に合わせて投与経路の異なる薬剤を組み合わせるコンビネーション療法も行われる。

週末注腸併用療法 寛解維持療法として注腸を週末(土日)に行うことにより累積再燃率を大幅に下げることが可能。

ペンタサ注腸 逆流防止弁の改良

従来はスリット式で薬液が出にくいと言う声が多かった。上下移動式の弁に変更し出にくさを解消。



患者様向け資材のオンライン請求

潰瘍性大腸炎の正しい知識と理解(第2版) 簡単!おいしい!いただきます!《おなかいっぱいになる料理》

簡単レシピ など潰瘍性大腸炎の患者様向けの資材がオンライン請求できる。杏林製薬 HP 内

<http://www.kyorin-pharm.co.jp/prodinfo/useful/materials/form.shtml>